寫眞週報

情報局編輯

八月十一日・第二百八十四號・十セン

昭和十三年三月二十三日　第三種郵便物認可　昭和十八年八月十一日發行（毎週水曜日發行）　第二百八十四號

ビルマ國の誕生

共同戰爭と
共同建設へ
起ち上つた新ビルマ國

⇧獨立の喜びに沸くビルマ留學生。中央（×印）はバー・モウ首相令息ザーリモ君
―東京都神田區孔雀荘にて

大東亞戰下燦として輝くビルマ國の獨立式典は、八月一日ラングーンで行はれた。この日朝、ビルマ方面陸軍最高指揮官河邊正三中將は、バー・モウ行政府長官に對し、同日を以て『現行政府の施政地域における軍政を撤廢する旨』の布告を示達し、過去一年餘に亘つて行はれた行政府施政地域の軍政の幕を閉ぢた。かくて獨立の準備全くなり、獨立準備委員會委員長バー・モウ行政府長官以下二十五名を以て建國議會が午前十一時より開會された。河邊最高指揮官も臨席、ビルマ一千六百万民衆の總意によつて『ビルマ國』の建設を決定、直ちに獨立宣言が發表された

ついで特定憲法ともいふべき國家構成の基本法を決定、國家代表の推戴に移り、前行政府長官バー・モウ氏を全員一致を以て推戴し、國家代表より力強い宣誓が行はれた。いまやバー・モウ國家代表統帥の下に、シャン、カレン兩地域を除く全ビルマを領土に、ビルマ人をはじめ、若干の土着民族、インド人等を協和的に抱擁する新獨立國ビルマ國が誕生したのである

こゝにおいてバー・モウ國家代表は直ちに組閣に着手し、閣僚十六名並びに樞密院顧問十九名を任命し、新内閣並びに樞密院は成立、政府は直ちに諸外國に對して獨立の通告を行ひ、次いで午後四時半、東亞建設、世界平和の一大障碍たる一切の禍根を芟除すべく、決然、米英に宣戰を布告、帝國と相携へて大東亞戰爭完遂に邁進するとの確乎たる立場を明らかにした

帝國は直ちに獨立したビルマ國を承認し、午後四時四十五分、特命全權大使澤田廉三氏とビルマ國内閣總理大臣バー・モウ氏の間に『日本國ビルマ國間同盟條約』の署名調印が行はれた

ビルマ國獨立に關して、帝國政府は一日午後九時、帝國政府聲明を發表、同時に東條内閣總理大臣談を發表、また同日を以てビルマに帝國大使館が新設された

ビルマ國の獨立は『萬邦をして各々其の所を得しめ兆民をして悉く其の堵に安んぜしむる肇國の大精神に基き東亞積年の禍根を芟除して新秩序の建設を期せんとする』帝國國是の顯現であ

⬅

日本國「ビルマ」國間同盟條約

大日本帝國政府及「ビルマ」國政府ハ

日本國政府ガ「ビルマ」國ヲ獨立國家トシテ承認シタルニ因リ

兩國ハ相互ニ其ノ自主獨立ヲ尊重シツツ各國ト緊密ニ協力シテ道義ニ基キ大東亞ニ於ケル共同ノ建設ヲ行ヒ以テ世界全般ノ平和ニ貢獻センコトヲ期シ

之ガ障碍タル一切ノ禍根ヲ芟除スルノ確乎不動ノ決意ヲ以テ左ノ通協定セリ

第一條

日本國及「ビルマ」國ハ大東亞戰爭完遂ノ爲軍事上、政治上及經濟上有ラユル協力ヲ爲スベシ

第二條

日本國及「ビルマ」國ハ大東亞各國ノ共榮ヲ趣旨トスル自主的發展及大東亞興隆ノ爲ノ共同ノ建設ニ付相互ニ緊密ニ協力スベシ

第三條

本條約ノ實施ニ關スル細目ハ必要ニ應ジ兩國當該官憲間ニ協議決定セラルベシ

第四條

本條約ハ署名ノ日ヨリ實施セラルベシ

「時の立札」は他へ轉載その他に御利用下さい

ビルマがいよ〳〵獨立した

大東亞戰爭のさなか、全世界の注目を浴びて「ビルマ國」は生れたのである。

御稜威の下、大東亞戰爭がもたらした餘りにも偉大な現實に、東亞民族あげて心からの歡呼とともに、肅然襟を正さしめる感激を覺える

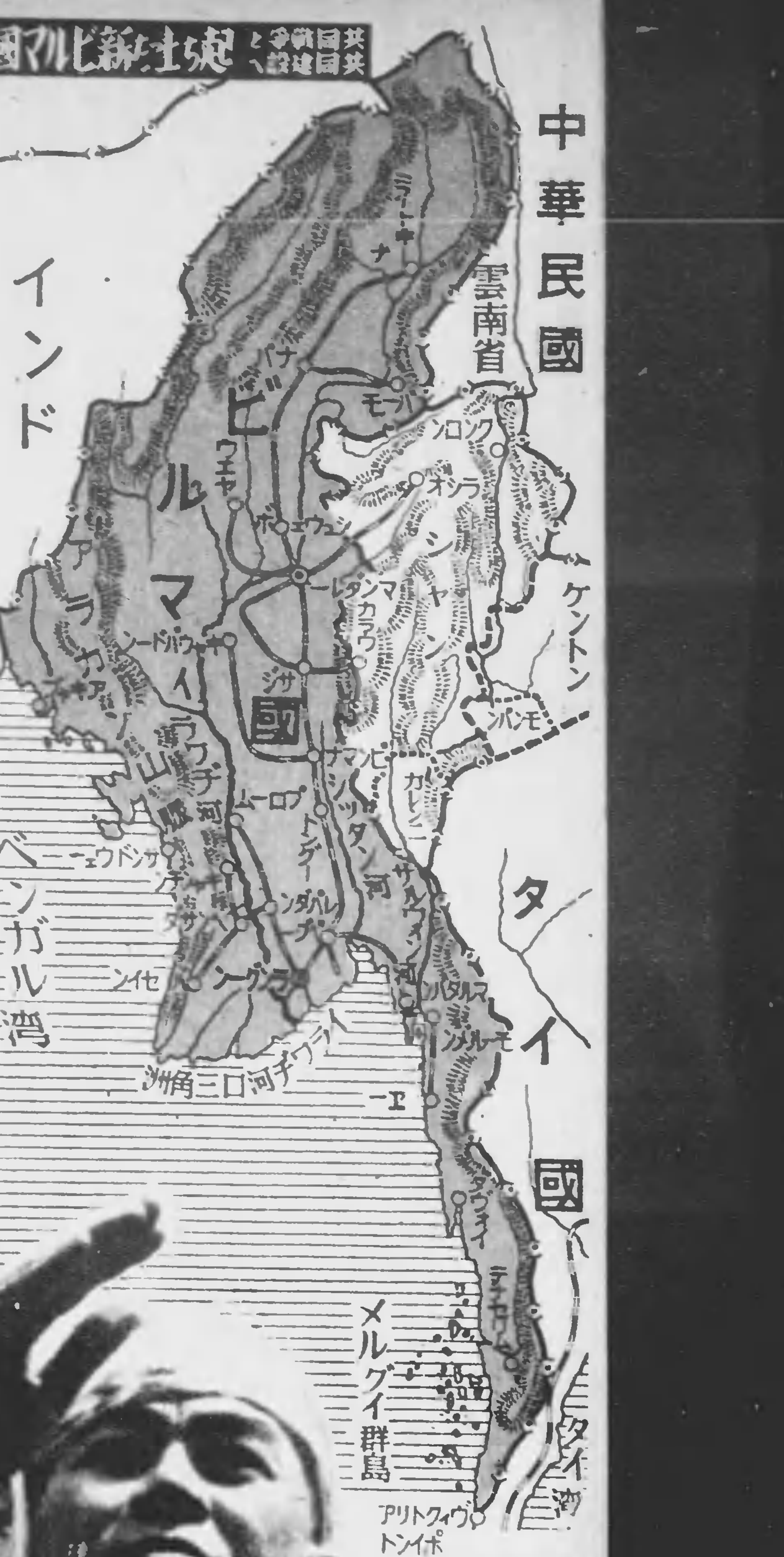
また、中華民國積年の願望である上海共同租界の回收も實施を見るに至り、治外法權の一部も撤廢されることになつた

顧みれば、滿洲事變に端を發して既に十有二年、幾多英靈の尊い血潮によつて築いた大東亞必勝の態勢はまさに確立されんとし、今や東亞の總力をあげて宿敵米英と雌雄を決する時は到來したのである

しかも、かくなるに及んで敵の反攻もまた熾烈を極め、世界戰局の重大性は今更多言を要しない

宣戰の大詔が渙發された朝、われら一億はたとひ全世界を敵としても、あくまで聖戰を完遂する鐵石の決意を固めた

今こそ、その決意新たに、すべてを直接の戰力增强に結集し、米英擊滅に邁進あるのみである



⬅り、またビルマ國は道義に基づき、日本と共に大東亞における共同建設を行ひ、以て世界全般の平和に貢獻せんとするもので、大東亞諸民族が各々の自主的發展と東亞興隆を目的として、その總力を結集し、共同戰爭の遂行並びに共同建設の必成のため、搖ぎない團結を強固にしてゐる證據である

未だにインド民衆が米英の制覇の野望の下に屈從してゐる姿と比較するとき、わが日本が如何に公正な態度を以て、東亞民族の福祉と繁榮のため、信義に基づいて約束を實行しつゝあるかは明瞭であつて、ビルマ國の獨立こそ、今後における大東亞各民族の歸趨を示したものともいへよう

我々はビルマ國の順調なる發展を祝福し、いよ〳〵大東亞各國家各民族の結束を強化し、ます〳〵歐洲友邦諸國との提携を緊密にして、大東亞戰爭完遂、大東亞建設必成に邁進すべきことを固く心に誓はねばならない

新內閣閣僚一覧

首相	バー・モウ
副首相	タキン・ミヤ
內相	ウ・バ・ウィン
外相	タキン・ヌー
財務相	ティン・モン
國防相	オン・サン少將
收稅相	ウ・エ
法相	ウ・ティン・モン
敎育保健相	ウ・ラ・ミン
農相	タキン・タン・トン
商工相	ウ・ミヤ
交通灌漑相	タキン・レイ・モン
林務相	ウ・ラ・ペ
厚生宣傳相	バンツーラ・ウ・セイン
協力相	ウ・トン・アウン
土木復興相	タキン・ルン・バウ（內定）

ビルマ起つ

明治十八年十一月二十九日（西暦一八八五年）、英將軍プレンダーガストの率ゐる英軍は非力のビルマ軍を蹴散して上ビルマの首都マンダレーを占領、ビルマの末帝ティボー王を捕縛した。こゝにビルマ王朝は終焉を告げ、全ビルマは悉く英の魔手に委ねられるに至つた

顧みれば、西暦一八二四年－二六年の第一次英緬戰爭によつて、英國は先づインドに近きアラカン地方と東南部タイ國境方面を奪取、次いで一八五二年の第二次英緬戰爭により中央南部ビルマを割取、更に第三次英緬戰爭によつて北ビルマを毒牙にかけ、全ビルマを降したわけである

英軍の手に捕へられたティボー王が英艦艇に移され、思ひ出深い王都マンダレーを後に、イラワヂ河を下航してインドに連行される日、悲涙のビルマ民衆は老若男女あげて河邊に慟哭した。彼等の國は奪はれたが、精神は決して奪はれはしなかつた。ビルマ王朝滅亡以來實に七年間、上ビルマのこゝかしこに繰り擴げられた民衆の反英抗爭に英國が如何に手を燒いたかは、この間の事情を物語るものである

大正三年（西暦一九一四年）、歐洲に起る風雲に刺戟されて結成され、日露戰爭後日本に學んだ傑僧ウ・オッタマ僧正を指導者とする『ビルマ佛敎青年會』は、ビルマ人の政治的自覺が初めて凝集したものであつた。以來ビルマの民族解放運動は英の彈壓下に徐々に展開され、大正九年頃のインド政廳のビルマ統治法に對する鬪爭、昭和五年の印緬分離統治問題をめぐつての紛糾等を經て、昭和十二年インドより分離せるビルマ統治法によるビルマ政府が出現した。これとてごく限られた面だけにビルマ人の參與が許され、重要施政は依然として英人の手に握られてゐた

まことに不幸であつたビルマ人。成程、中心都市ラングーンは昭南やバンコクやサイゴンに比べて優るとも劣らない立派な都市と思はれる。けれども、これはビルマ人の都市ではない。英人どもの幸福と權勢のための都でしかなかつた。ラングーン市の土地でビルマ人の所有にかゝるもの僅かに一割あるか無しといふ事をもつてみても、思ひ半ばに過ぎるものがあらう

由來、英人どもは必要のない限りビルマ人と交際もしなかつたし、彼等の苦手である佛敎界にはそつぽを向いて關しなかつた。ビルマ人を惡疫から救ふでもなし、ビルマの青少年層に世界の學問を教へるでもなし、技術に職を[illegible]するでもなし、ビルマ人な[illegible]のである。英人ども自身が立派な家屋に多數の召使を擁し、ビルマ人の血稅になる高給を食み、ウィスキーと運動と雜談に快樂の日日を過してゐればそれでよかつた

人を愛さなければ自分も亡んでしまふ。佛敎に說く因果應報はビルマの生活信條である。ビルマ人に一片の愛情もない者がビルマを支配することはあり得べからざることである。第二次歐洲戰爭勃發後、敗戰續きの英の焦慮憂色が隱し切れないものとなり、これと反比例的にビルマ人の反英鬪爭が活潑化し、その指導者達は、インドと同樣に多數投獄された。バー・モウ首相はモゴクの監獄に投ぜられ、タキン・ミヤ副首相もまた獄に呻吟してゐた。前交通灌漑部長官タキン・バセインは國外脱出を企てて投獄された。英人どもは指導者の投獄で大事なしとみたが、いづくんぞ知らん、ビルマ民衆の活眼は、東方を凝視してらん〳〵と輝いてゐた

畏くも宣戰の大詔渙發あらせられるや、皇軍の赫赫たる戰果に、英人等は周章狼狽しつゝも敗報をひた隱しに隱し、一方惡宣傳に馬力をかけ『日本兵は住民の耳を切り手を切つて迫害するぞ』『日本の飛行機はイタリアから貰つたもので、さう遠く飛べない』等々、荒唐無稽の流言をふりまいた。ビルマ民衆は日本の事情を必ずしもよくは知らなかつたが、東方から轟く皇軍の盛んなる鐵蹄の音が心強く響いた。殊に毎夜東京からのビルマ語放送は、どんなにか彼等を沸かしたことか。英人監視の眼を逃れ、ラジオのある家に集つた

この念願に應へて昨年一月、皇軍はビルマに進擊した。神兵來るの報は全ビルマ民衆を雀躍させた。かくて、一月三十一日モールメン完全占領、三月八日ラングーン陷落、五月一日マンダレーを攻略し、遂に五月下旬全ビルマを戡定した

この間、ビルマ民衆は皇軍に心から協力したのだ。殊にタキン黨員を中心とするビルマ獨立義勇軍の敢鬪ぶりもさることながら、皇軍の進擊する町といふ町、村といふ村で示したビルマ民衆の限りない信頼は、大東亞戰爭史の一頁に綴はるべき美しくも涙ぐましい詩材でなければならない

かくて、六月三日ビルマに軍政施行、バー・モウ博士を委員長とする中央行政機關設立準備委員會が結成され、八月一日には行政府設置、軍政要員、行政府員渾然一體となつて、大東亞共榮圈建設に資せんとして、目覺しい努力を續けてきたのであるが、本年一月二十八日、帝國議會に於て『遲くも本年中にはビルマ國の獨立を認めんとしてゐる』旨の帝國の大方針が中外に聲明されて、ビルマ人を感謝感激の坩堝に投じた。更に三月二十五日、東條總理は帝國議會に於て再びビルマの獨立に關し、新ビルマ國がその創意と責任とにおいて速かに完全な獨立國の實質を具へるとともに、道義に基づく新國家たることを冀念する旨言及され、折から滯京中のバー・モウ長官はもちろん、ビルマ民衆の決意を促されたのであつた。

越えて五月八日、バー・モウ長官を委員長とするビルマ獨立準備委員會が結成され、政界の長老タキン・コドウ・マイン、カレン人代表サン・シー・ポ博士等二十五名の各界代表の委員が、熱情を吐露して獨立の諸要件を決定し、めでたく今日、『獨立』の榮光の日を迎へたわけである

思へば第一次英緬戰爭以來百年有餘、ティボー王の連行以來半世紀、今や過去の邪惡、暗黯を全く拭ひ去つて、見よパゴダ（佛塔）といふパゴダに、颯爽と仰ぐ孔雀旗。げに、感謝感激の涙は全ビルマ人の頰に溢れてゐる

今日、ビルマ民衆は皇軍に協力し、各方面に亘る建設奉仕隊やビルマ防衞軍に參加して尊い奉仕の勞働をし、また敵殲滅の楯たらうとしてゐる

皇軍への協力、そしてビルマ建國に向つて示された異常なる熱意と協力ぶりを見よ。戒律のやかましい佛敎界は二千年來の劃期的大躍進をとげて、近く打つて一丸となり、新國家に協力し、小黨相剋に惱んだ政界は昨年來一國一黨のド・バマ・シンエサ黨によつてビルマ國の地盤を築いたし、文藝界はビルマ文藝院によつて興國の實を擧げようとしてゐる

ビルマ民衆の國土防衞運動は、昨年末、指導者の訓練を以て展開されたが、今やビルマ全縣に亘つて男子女子の民防衞指導者を中心として、不斷に、組織的に活潑な歩みを續けてゐる。防空、防諜、公路愛護、生産增强、消費節約、人心安定等、各面に亘つてビルマ史上空前の參戰體制が組織され、淸新潑剌な新國家の逞しい力となつてゐるのだ

接敵地域ビルマは、かりそめの氣安めも許さぬ。この雄々しく緊張した雰圍氣の中に、ビルマ民衆はじつくりと腰を据ゑ、あらゆる苦難に打ち勝つて、國力を日ごと內に蓄へてゆく。そこに新國家の戰力がある

あゝ、新らしい國家ビルマ。わが盟國の大精神はこゝに具現。われ〳〵はビルマ民衆と共にこの榮光を身一杯に浴びると共に、今日の喜びを分つことなくビルマ作戰並びにビルマ周邊の作戰において惜しくも散華、大東亞建設の尊い人柱となつてビルマの山野平原に眠るわが忠勇の英魂に、心からなる感謝の念を捧げずにはをられない（現地寄稿）

『獨立の歡喜をもつて、日本と共に米英擊滅戰へ征かん』邁進するビルマ國民にバー・モウ首相は叫ぶ

⇧全國土から選ばれた民防衞の婦人幹部養成の合宿訓練がラングーンで行はれてゐる。『獨立の歌』の奏樂のうちに婦人部長バー・モウ夫人の査閲を受ける乙女の顏はビルマ國民の自覺に明るく逞しい

副首相　タキン・ミヤ

外相　タキン・ヌー

國防相　オン・サン少將

農相　タキン・タン・トン

內相　ウ・バ・ウィン

財務相　テイン・モン

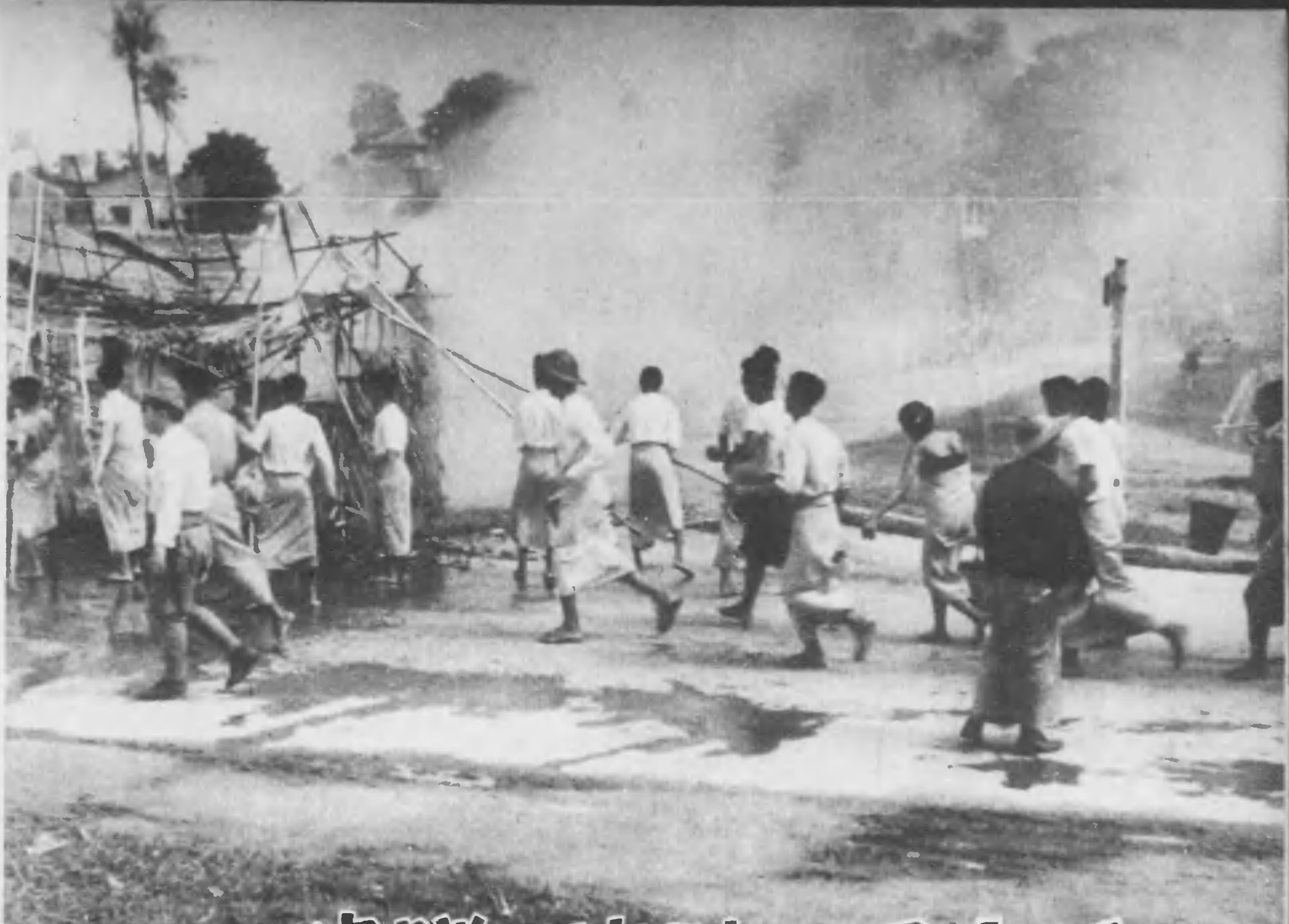
法相　ウ・ティン・モン

商工相　ウ・ミヤ

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

起ち上つた新ビルマ國

ビルマの防空も隣組で



⇧火は隣家に延燃したといふ想定のもとに、隣接隣組員も迅速に驅けつけての消火作業

光榮の祖國に高鳴る胸の鼓動を、このまゝ燃ゆるが如き祖國愛に置きかへて、起ちあがるビルマ人は新國家の育成に、各人が貢獻な姿を各所に顯現してゐるが、〝ビルマの防空はわれ〳〵の手で〟と自ら盛りあがるやうに結成されたラングーン警防隊と隣組組織もまたその一つの現はれであらう

かねて防空思想の普及とその指導にあたつてゐた現地軍當局では、パハン、カマヨの兩地區を模範地區と選定し、同地區の警防隊、隣組を動員して模範的綜合訓練を行ひ、これを公開した

この朝、兩地區の警防隊員、隣組員は早朝から待機、訓練空襲警報について焼夷彈落下の非常警報が鳴り渡るや、防空壕に待避してゐた隣組員は、スハとばかり火叩きやバケツ、水をかついで現場に殺到。日頃の訓練にものをいはせて、火叩きやリレー式バケツ輸送の手並も鮮かに、忽ち焼夷彈を消し止めた

その整然たる訓練ぶりに當局も感服して、〝今後は更に訓練を勵んで、他の町村への模範となるやう希望する〟と激勵され、ドバマを齊唱して、さらに國土防衛に邁進することを誓つた

[illegible] 小黒誠一

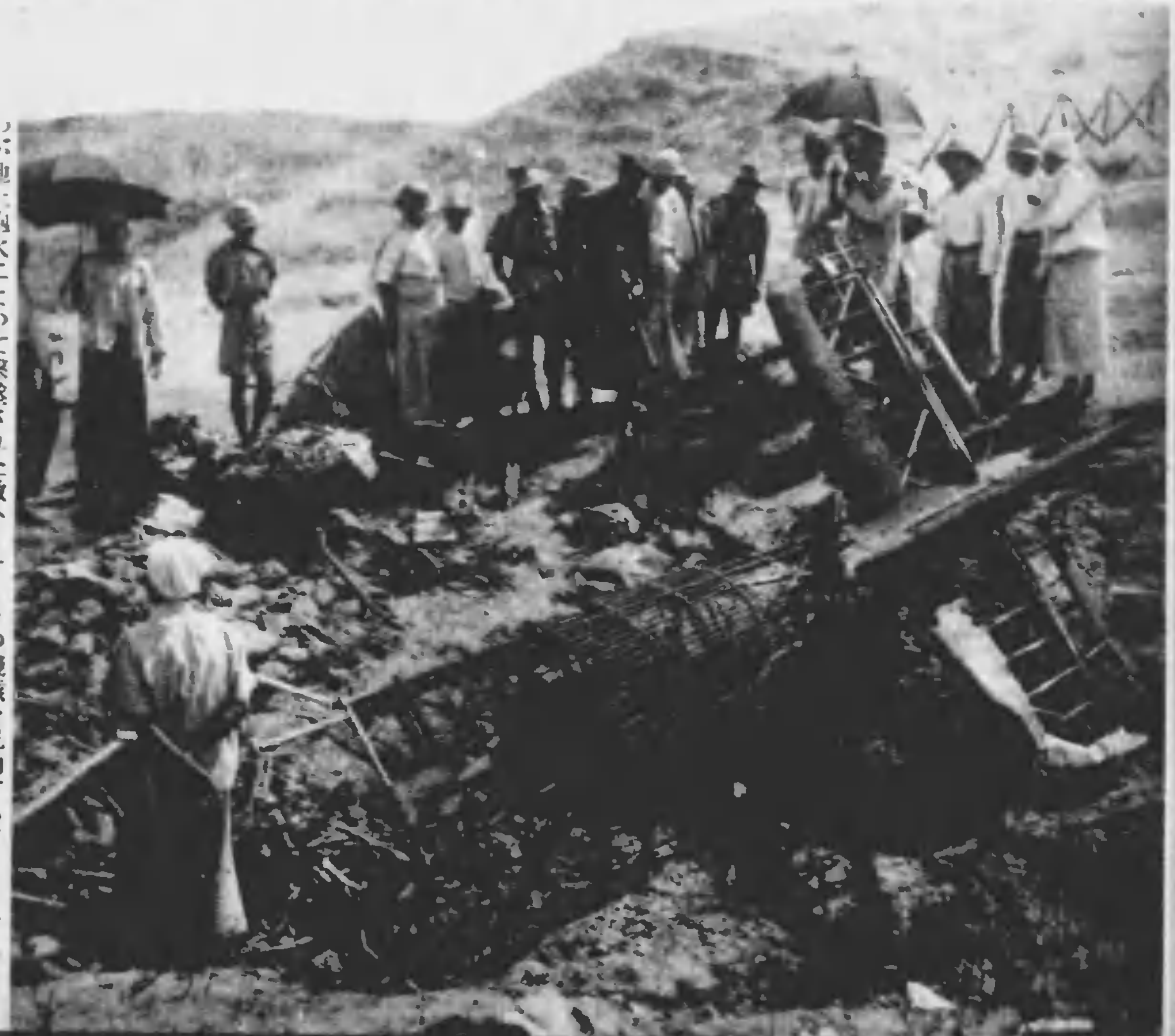
⇨綜合訓練を終へて〇〇部隊長の講評をうける隣組員

⇦當日の訓練に参加したビルマの婦人たち

⇩それ〴〵持場に着いて日頃の腕を[illegible] [illegible]傷の手當をする看護婦

⇦待避状況を觀察する當局係官と、雨期のビルマならでは見られぬ屋根附の防空壕

⇨訓練空襲警報が發令されるや、〝スハ敵機!〟とばかり眞剣に大空を見守る隣組員の監視ぶり



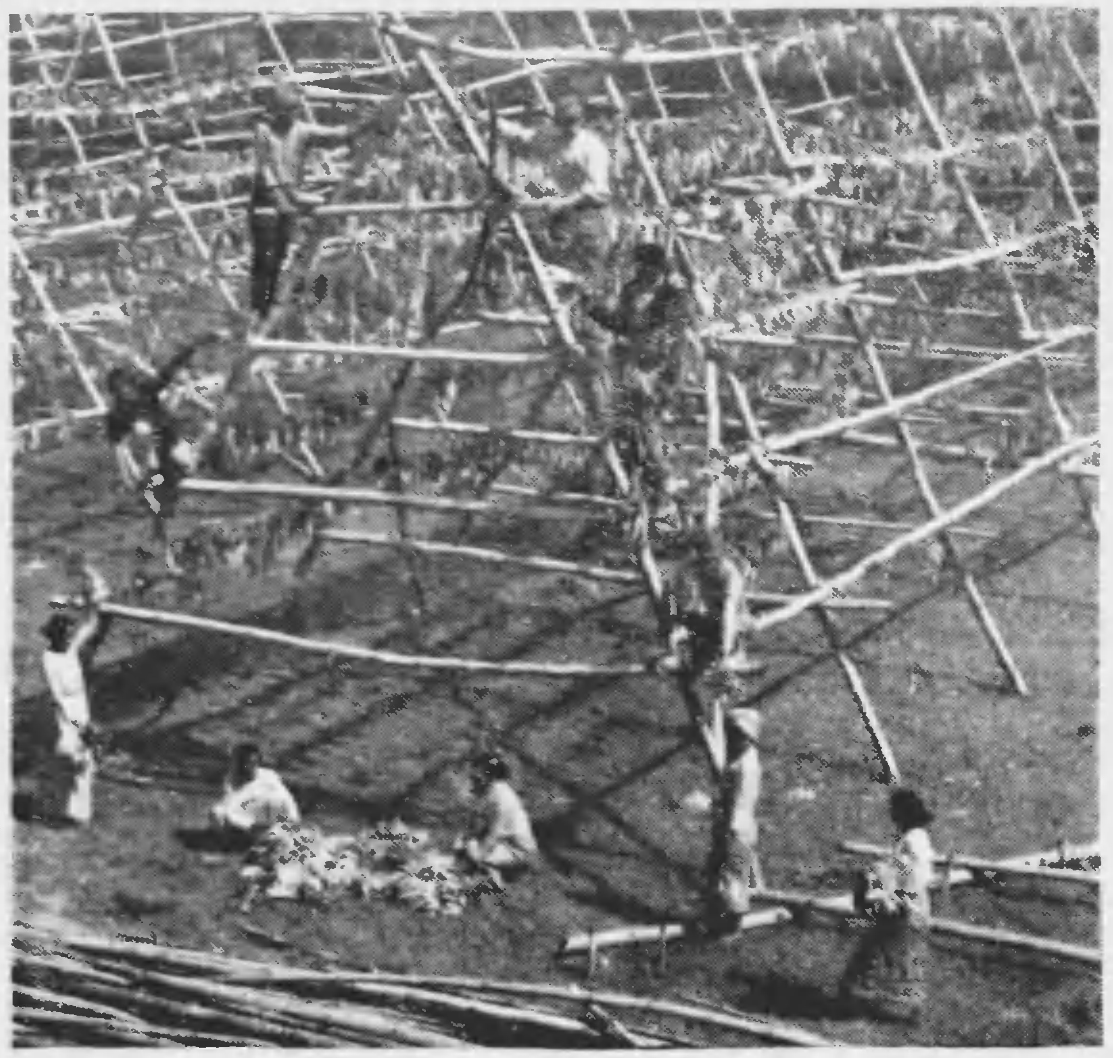
わが地上砲火によつて撃墜された敵ハリケーンの殘骸を見物するビルマ人

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

澤庵の現地自給

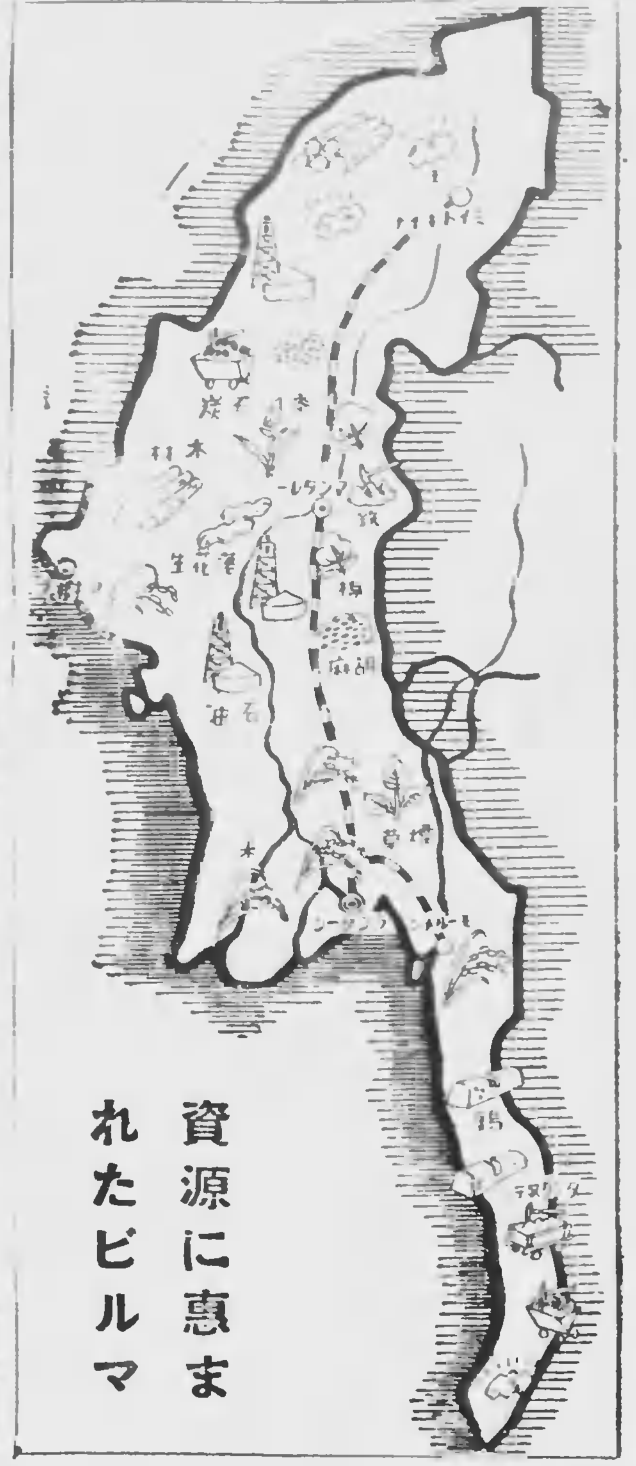
ビルマ○○部隊自活研究所

[illegible] 陸軍報道班員 小黒 誠一



⇦手塩にかけた甲斐あつて、見事に成育した内地種の大根を手に喜ぶ兵隊さんと、農園に働くビルマ娘

みる／＼うちに干大根の花が咲く　下



資源に恵まれたビルマ

『たくあんでお茶づけをくひたいなァ……』と、ビルマの[illegible]で、しみ／＼と語り合つてゐた兵隊さんのひとむれがあつたが、その[illegible]、ところもおなじビルマの○○で作られてゐる『○○部隊自活研究所』と、丸太に書かれたもの／＼しい門札に、ちよつとたじろぎながら訪ふと、同部隊矢野曹長を所長に、兵隊さんたちが赤いロンギ、青いロンギのビルマ人たちの眞摯な協力を得て、大根の栽培から漬け込みまで、いつさいがつさいビルマ製澤庵漬の現地自給に、大變の體であつた

二回にわたる試作栽培は、氣候風土の關係から發芽さへせず失敗に終つたが、不屈な敢闘精神と日夜をわかたぬ旺盛な研究心とが實をむすんで、三度目の改良品種は見事に成育した。いま三ケ村にある同部隊の附屬農園は、練馬大根以上の良品で埋まつてゐる。漬け場は、敵が遺棄したセメントを巧みに使つて作つた立派なものだ。ずらりと並んでゐる。そのまゝそつくり防空壕にでもしたいやうな頑丈さである。既に二回にわたつて出荷した試作品は、關係方面に好評を博してゐるから、前線の兵隊さんたちが〃母國の味〃に舌鼓をうてる日も決して遠くはない。しかも、いまこゝに働くビルマ人たちは、光榮ある獨立に胸躍らせつゝ文字通り獻身的協力を傾けてゐるから、ビルマ全軍補給の計畫も決して夢ではない。大東亞戰下、華々しい戰果の蔭にあつて、黙々として地味な食糧確保の職務につく、これら兵隊さんたちの勞苦をわすれてはならない

⇦〃干され〃ゆく大根　兵隊さんの手からビルマ人の手へ、そして干場へ……パゴダの下で日緬協力の〃味〃が作り出されてゆく……

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

起ち上つた新ビルマ國

☆パディゴンの戰ひ☆

ビルマ人作家　オウトウ

挿繪　荻原賢次

ビルマ國誕生の陰には、東條總理のいはれたやうに、英國の非人道的壓迫に無念この世を去つたビルマ志士とビルマ作戦に協力蹶起したバー・モウ氏以下のビルマ人士の努力があるばかりでなく、幾多忠勇義烈な皇軍將兵とビルマ勇士とが尊い興亞の人柱となられたことを念ひ、謹んで敬弔の誠を捧げよう

この一篇はビルマ山野に轉戦する皇軍將兵を、神兵來るの感激を以てビルマ人作家が描いたもので、戦ひさなかにも情を忘れぬ日の本の武士を心から讃へてゐる

愛する妹マー・ミャ

ランダーン・プローム道路に沿うて繰りひろげられた戦闘中、パディゴンの戦ひは最も大きな戦争の一つで、シュエダウン（プローム郊外）の戦闘にも比すべきものであらう。パウンデ（プローム縣下）の戦ひはたつた一と晩のことであつたが、この戦闘は朝の五時半頃から夕方の八時半頃まで、約十五時間に亙つて行はれた。マー・ミャよ、お前が若しこゝにゐたとしたら、きつとびつくりして死んでしまつたかも知れない

叔父さんはランダーンにゐるとき、戦争のニュースを活動館で見たことがあるが、この戦闘は自分のこの眼で見た。現代の兵器は全く驚くべきものだ。殊に機関銃、大砲、航空機のすばらしさ

石油の海

戦闘について書くに先立つて、イギリス人がどんなにして石油を無くしてしまつたかを知りたいと思ふ。パディゴンの北四哩の所にチダーン町があり、ビルマ石油會社所有の石油タンクがあつた。戦争の起る三、四日前、破壊目的の英人達がチダーンに乗り込んだ。精米場を焼き、電話線を切斷し、橋梁や石油タンクを破壊するの昼夜兼行の仕事であつた。かくして貯蔵油は大河をなして流れ、民衆は欲しいだけの油をとつた。この噂は野火のやうに隣村にひろがり、何百といふ荷牛車やサイカーに乗り、壺や樽を持つて油をとりにやつて來た。私もサイカーで行つた。何んでも、パディゴンとチダーン間の路は牛車やサイカーや人で一杯で、賑かなランダーンのボーレーバザー通りでも比べものにならないほどの雑沓ぶりであつたといふことである

油をとるため、我々は油の中を膝まで浸して行つて、樽や壺に入れなければならなかつた。その間、民衆は異口同音に叫びだした。

「持こな、欲しいだけとるんだぞ。煙草を喫つてはいけないぞ。燐寸を持つてゐてはいかんぞ。この油は我々の國の産物だ。我々のものだ。我々のものだぞ」

我々は皆そんな油で濡れた。まるで人間のやうには見えなかつた。

私はサイカーで二度、油を運んだ。この家も、隣の家も、すべての家が油、油であつた。油一罐がたつた二十五セントで買へた。そのうち、近くの村々で火が起つたと聞くやうになつた

戰車鹵獲法

英人たちが物を破壊するのを見て、私は不安になつた。私は妻と子供を近くの村に移した。パウンデの戦ひで、多數の英兵が殺され、澤山の戦車がパディゴンに退却した

戦車鹵獲は極めて容易である。だがしかし、勇氣が要る。ハラキリー精神を持つ勇敢な日本兵のやうな勇氣が。まだ物も定かに見えぬ早朝、二人の日本兵が二箇の里程標を隠し持つて、道の傍にうづくまつてゐる。退却するイギリスのタンクが全速力で過ぎる。タンクが通過したと見るや、二人の日本兵がその後を追つかけていつて、両側から輪の間に里程標を突込んだ。戦車がガラ〳〵と廻つた。と見る間に日本兵は戦車の上に乗つて、戦車の中に手榴弾を投げた。戦車の中にゐた英兵は面喰つて、戦車もろとも生捕りにされたのであつた

戦車鹵獲には今一つの方法がある。私は見なかつたが、目撃した一友人の語るところによると、日本兵は布切のついた瓶の中にガソリンを入れてゐた。戦車がやつてきた。彼等は戦車に瓶を投げた。そして瓶のあたつた所を目がけて撃つた。戦車は燃え出した。戦車の中の英兵は焼けてはたまらぬと、出てきて降伏した

こんなわけで、英人達は日本軍に出くはすと、いつでも逃げた。時には、戦車を操縦してゐる連中が恐れて進路を誤り、パディゴンの西方の沼へふみこんで日本軍の俘虜になつたりした

戰闘

戦闘状況を述べる前に、パディゴンの位置について書かう。こゝはランダーン・プローム道路から五哩距つたランダーン・プローム鐵道の沿線にある。そして、パディゴンからは三つの道路が出てゐる。その一は南に出てプローム道路に合し、その二は北に出て鐵道に沿うてプロームへ、その三は僅か五哩の長さの道路で終點が大きな湖になつてゐて、こゝで英軍の戦車は降伏しなければならなかつたのである

私はパディゴンがビルマにおける戦場の一つになるとは思はなかつた。といふのは、こゝはプローム道路から離れてゐるから。しかし、パディゴンからプローム道路までは二十五哩で、プローム道路だつたら四十哩ある。こんなわけで、パディゴンは戦場になつた。英軍は川沿ひにプロームに退却していつた。彼等は迅速な日本軍に退路を断たれることを恐れてゐた。そこで、たつた一日しかパディゴンに止つてゐなかつたのである

四月の最後の週に、パディゴン戦が始つた。その前日、私は妻と家族を近くの村に送つた。眞夜中頃、部隊がパウンデからパディゴンに移動し始めた。多分五百人位の兵だらうと思つたが、三千人もゐた。彼等は、その部署についた

私は一人の英將校に向つて、戦争があるのかと尋ねた。すると彼は、日本軍の出方如何だ、こゝに止つてゐない方がいゝ、と私に忠告してくれた。しかし、私は戦争が見たかつた。私は私の家の前に大砲が置いてあるのを見た。そこで、もし戦闘でも起つたら避難壕が必要だと思つたので、急いで小さな壕を作つた

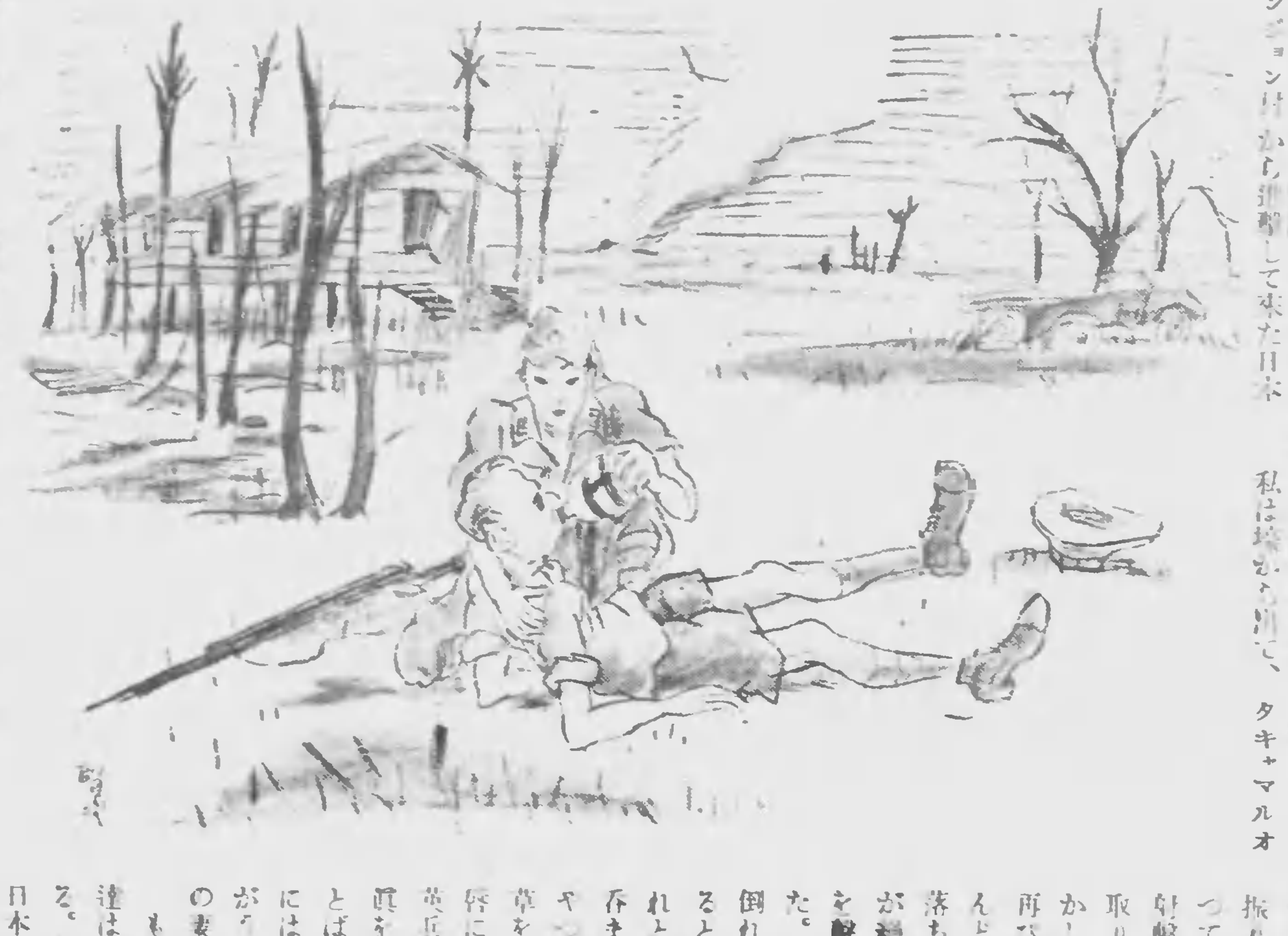
たつた一日待つて、大砲が俄に轟き、これにつれて銃といふ銃が火を發するのを見た。月は丁度地平線の彼方に没しようとしてゐた。町には魔のやうな英兵が君臨してゐた。人々はあちこちに走り出した。鳥はかあ〳〵と啼き騒ぎ、犬や猫もそこらあたりの隠れ場所へ走つた。私は壕の中で腹這ひになつてゐた

日本の砲兵が背後の方で撃ち始めたが、暫くすると、一方から二時間に亙つて砲撃である。英兵は恐怖に陥つて、走り出した。無數の自動車や戦車が路上を疾驅した。中には行く方向も分らないまゝに――

眼をあけて周囲を見回すと、夜が明けかけてゐた。私の家の前にあつた大砲は最早無かつたが、幾人かの英兵が地に腹這ひになつて、絶えず機関銃をタタタ……と撃ちまくつてゐた。彼方の稲田の方はと見ると、勇敢な日本兵が地上に身をかゞめ、鶉のやうに飛びながら前進また前進して來るのだつた。肉薄戦で、一方はいつも勝ち、いつも支配的で、まつしぐらに敵に迫り、一方はいつも叩きのめされて逃亡する。このやうにして英兵は退却し、逃亡し、勇敢な日本軍は喊聲高らかに肉薄していつた

私の家の前にあるドウ・マ・ミャの家の下の地下には、機関銃を持つた三人の「白猿」がゐた。彼等は前方にをつたのだが、背後からやつてきた大膽な一人の日本兵に氣がつかなかつた。この日本兵は銃剣を突きつけて三つの機関銃を鹵獲してしまつた。もう一人の日本兵はアメリカ兵に小銃を擬して彼を俘虜にしてしまつた。日本兵の勇氣は英兵と比べものにならなかつた。日本兵達は撃ちて後止む精神を持ち、英兵はたゞ逃げることのみを考へてゐる

太陽が東に現はれる少し前には、實際英部隊はパディゴンにゐなかつた。そこで、ラウンジ村、イン・タイ・タン村に據る英部隊と、シンジョン村から進撃して來た日本部隊の間に激しい戦闘が行はれてゐた。日本軍はプローム道路及びテゴーンへ退却しようとする英軍の退路を遮斷した。若し英軍が早く退却しなかつたら、夜明け前には殲滅されたことだらう。日本軍は周囲からパディゴンを取り巻いて町へ進入してきた。しかし、英軍はもう町にゐなかつた



私は壕から出て、タキャマルオン・バンダの入口へ通ずるチャンガン通りの方へ歩いていつた。私は一人の日本兵に會つた。水を與れないかとの頼みに、私は水をとりに隣の家へ入つた。水を持つて戻つてくると、チャンガン通りを全速力で自動車を飛ばす二人の英將校が目撃された。と、日本の兵士は水筒を差し出した私の手を振り向きもせず、柱の後に忍び寄つて、自動車が接近したと見るや射撃した。英將校の一人も拳銃を取り出して日本兵を射撃した。しかし、日本兵は柱の陰に身を隠し、再び射撃した。二人の英將校はもんどりうつて自動車の中から轉げ落ちた。一人は心臓を射抜かれ、息が絶えかけてゐた。他の一人は腿を撃たれたが、直ぐには死ななかつた。彼は帽子をとつた。そして倒れた。日本兵が傍にやつてくると、その英兵は水を呑ましてくれと懇願した。日本兵は自分が呑まうとしてゐた水を彼に與れてやつた。それからポケットから煙草を取り出し、火をつけ、英兵の唇にこれを入れてやつた。すると英兵は彼のポケットから一枚の寫眞を取り出し、これで永の別れだとばかりに寫眞に接吻した。寫眞には子供をかゝへたイギリス婦人がうつつてゐた。きつとこの英兵の妻と子供であらう

もう朝の十時半である。日本兵達は支度を済ませ朝飯をとつてゐる。しかし、幾人かの馬に跨つた日本兵達は私の家の後の棉の木の下にゐた。二十分もたつた頃、我我はパディゴンの北のヤーラ村の方で大砲の音がするのを聞いた。一人の日本兵が私に腹這ひになれと言ひ、彼もまたさうした。私はこれらの日本の兵隊達が我々の方に弾が落ちてくるのを知つてゐるとは考へなかつた。が、一將校が命令を下し皆んなが腹這ひになると、果して弾丸が棉の木に炸裂し、木の下の馬は死んだ。幸ひ人間には死傷がなかつた

やがて、日本兵は英兵のゐると思はれる方向に銃を向けながら突進していつた。私はもう、こゝにゐる必要はなかつた。私は安全な場所へ身を移した。十二時半頃、日本機が三機町の上に來て一度、二度旋回し、道路の彼方に去つた。午前中のこの戦闘でボージーボン、イン・タイ・タン、コティンゲイ等の村、それからラウンジ村の半分は英兵のために焼かれてしまつた

さう〳〵、私は今一つ書きとゞめることを忘れてゐた。それは英兵の暴虐な仕打ちである。十二歳になるモン・プ・ガレといふ少年がタマリンド樹の上でパディゴン戦を見てゐた。二人の英兵がそこへ通りかゝり、少年を見ると下りて來いと命じた。そこで、少年が樹から下りてくると、拳銃で射殺してしまつた。何故こんな少年を殺さねばならなかつたか、誰もその理由を知らない。少年をスパイと思つて殺したのかも知らぬが、こんな子供がスパイすることを知つてゐるわけがない。少年の両親は泣き崩れ、人々が、英兵は非道い奴等だと言ひ聞かせても泣きやまなかつた　――（雑誌「サエシャ」作家四月號より）

朝鮮同胞も護國の大任に

大東亞戰爭は決戰段階に突入、敵は血みどろの總反攻を繰返してゐるが、この秋に當り、國民皆兵のわが兵制は更に巨大な一歩を進め、新たに朝鮮二千四百万の同胞も、光榮あるわが兵役の榮譽を擔ひ、護國の大任につくことになつた

徴兵制の施行に先立ち、昭和十三年、先づ特別志願兵が採用せられ、こゝに朝鮮同胞も年齡滿十七歲以上の男子で、總督府陸軍兵志願者訓練所を修了した者は、現役または補充兵に編入され、軍務に服することができることになつたのであるが、支那事變以來、朝鮮同胞の愛國の熱誠は頓に昂まる一方、志願兵の成績も年を逐うて向上し、その優秀な者は既に將校となつてをり、戰場における活躍もまた目覺しく、殊勲の恩賞を賜はつた者もあり、護國の英靈として靖國神社に合祀された者もある

殊に鮮血淋漓たる中に、戰友に抱き起されながら、遙かに宮城を拜し 天皇陛下萬歲を三唱して瞑目する如き、その最期は誠に立派な皇軍將兵であり、こゝにいよいよ徴兵制が實施されることになつたのである

かくして去る八月一日、徴兵制の施行と同時に、滿十七歲以上明年適齡までの男子は直ちに第一國民兵役に服することになり、明年の適齡者は、明年徴兵檢査をうけ現役兵に合格すれば、明年十二月以降軍隊に入營するのであるが、今や國民皆兵は名實ともに兼ね備はり、一億悉く皇民御神兵となつて、米英擊滅に突進する日は來たのである

寫眞は總督府陸軍兵志願者訓練所で營々訓練を勵み、晴れの日を待つ朝鮮同胞

⇗技術の上達も目覺しい。裂帛の氣合とともに突き出される劍尖がやがては……

⇧堂々たる軍靴の響き。營の[illegible]も駒に改めて正に威風堂々である

見事な[illegible]障礙—志願兵の入營後の成績も內地の兵に比して決して遜色がないといはれる 上左

訓練所から兵營へ、その日も間近に迫つてゐる。自習時間の勉強も眞劍だ⇩

教官の一語々々に耳を澄まし、やがては必ず護國の神となつて先輩に續く決意を堅める⇙

逞しい朝鮮の銃後

⇧戰時を前にして京城神社に詣でる[illegible]人々の姿　ここにも内地人と朝鮮人の差はない

朝鮮同胞の愛國の熱情は[illegible]、⇩[illegible]―金屬回收

朝鮮統治の根本方針は、まづ[illegible]同仁、朝鮮同胞をことごとく皇國臣民に歸一せしめられる大御心につきる。[illegible]の下に施政以來三十四年、朝鮮同胞は皇國臣民としての資質の向上錬磨に努め、朝鮮在住の内地人とともにこれを[illegible]、以て文化に[illegible]に、[illegible]の躍[illegible]。

殊に滿洲事變以來、[illegible]に捧げきつた全鮮二千四百万同胞の愛國の熱意は、更に支那事變から大東亞戰爭を通じて、いよいよ[illegible]新、今や總力をあげて戰爭完遂に邁進する内鮮一體の姿は、この度の徴兵制の實施によつても十分窺ふことができる

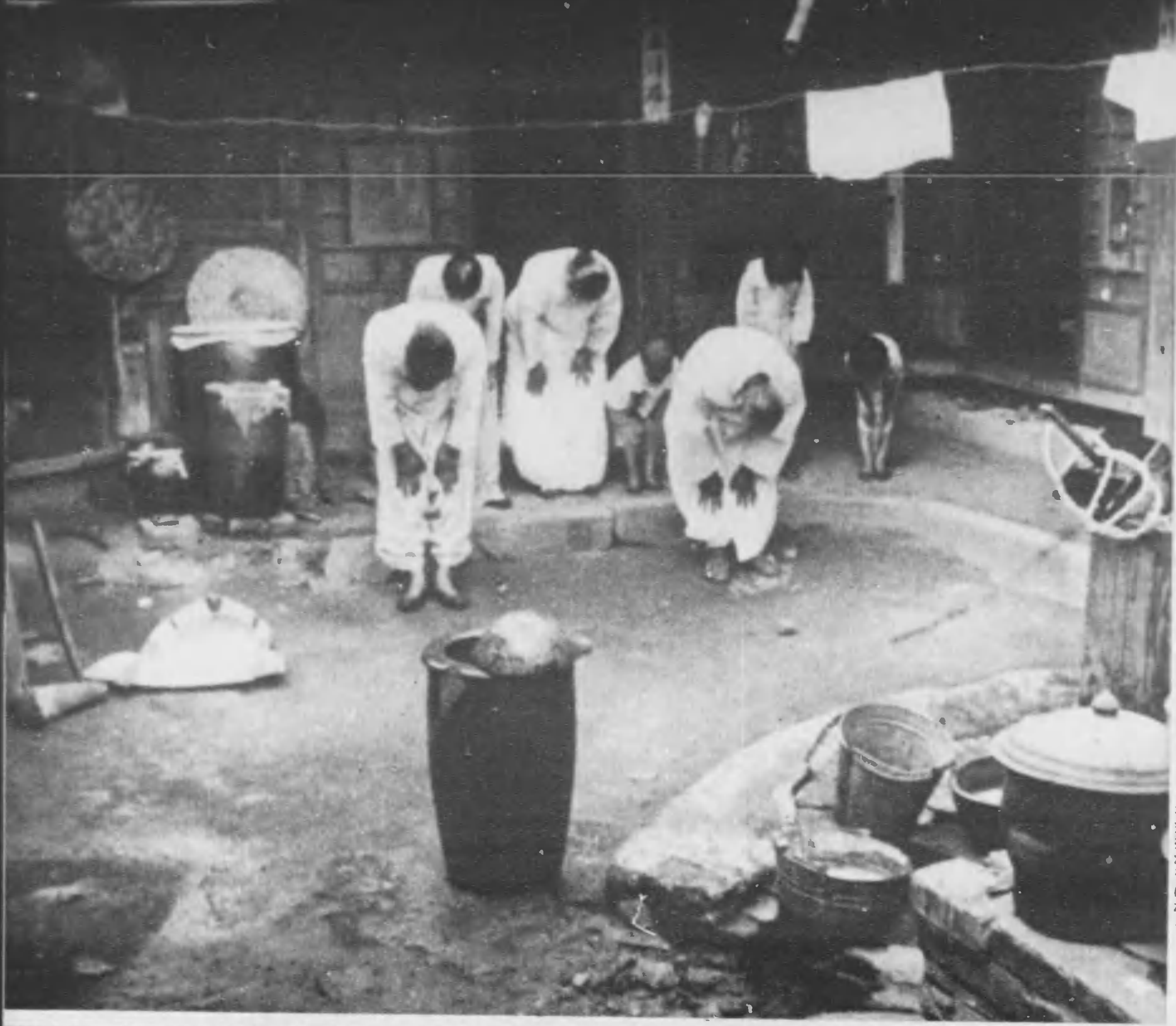
一、我等ハ皇國臣民ナリ、忠誠以テ君國ニ報ゼン

二、我等皇國臣民ハ互ニ信愛協力シ、以テ團結ヲ固クセン

三、我等皇國臣民ハ忍苦鍛錬力ヲ養ヒ、以テ皇道ヲ宣揚セン

以上は全朝鮮同胞があらゆる場合と會合において[illegible]民誓詞の一節と[illegible]、[illegible]一人々々が皇國臣民道實踐の[illegible]としてゐる皇國臣民の[illegible]であるが、この[illegible]に[illegible]、大陸の前進兵站基地朝鮮に負荷された使命達成に邁進する朝鮮同胞の姿こそ、[illegible]統治の神髄を遺憾なく中外に[illegible]するものであらう

内地に呼應して[illegible]にまた上下一體となつた力強い活躍が見られる―朝鮮婦人の勤勞奉仕⇩



⇦國語の普及と常用の勵行は皇國臣民化と一體不可分である。國語普及講習會で國語の熟達をはかる人たち

⇦國民總力運動の實施事項の一つとして、毎朝一定時に全國一齊に宮城遙拜が行はれる

⇦公債割當の常會――昭和十七年には國民貯蓄九億圓の目標を遙かに突破し、九億九千五百十七万五千圓に達してゐる

⇦既に志願兵として戰地にゐる愛兒のために一針々々の奉仕をもとめる母。全く内地と同じ頼もしい風景だ

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp/

気持のよかった満洲の汗

滿洲建設勤勞奉仕隊女子青年隊

滿洲建設に注ぎこむ我が青少年の逞しい意欲が實を結んで、滿洲國はすく／＼と伸びてゐる。今夏も全國道府縣から選ばれた二百五十名の滿洲建設勤勞奉仕隊女子青年隊が六月上旬から六月下旬までの約一ケ月間、滿洲開拓青少年義勇軍訓練所や開拓團で尊い汗の奉仕を行ひ、無事歸還した。隊員は何れも若さと健康に溢れ、將來は大陸に進出して滿洲建設に挺身しようといふ頼もしい女性ばかり。それそれ郷土の出身者が屬してゐる訓練所や開拓團に配屬されて、被服の補綴や洗濯、炊事、清掃作業、農耕輕作業などに、健手よく期間一杯頑張り續けたが、歸還後も大陸の實踐的訓練で體得した興亞精神を活かして、女子青年團興亞運動の中核體となり、女子青年の使命遂行に邁進することになつてゐる

撮影　大日本青少年團

⇧訓練所が見える。萬歳！ 萬歳！ 義勇隊の元氣な顏が迎へてゐる

⇦おほらかな朝陽を浴びて食前の作業へ……

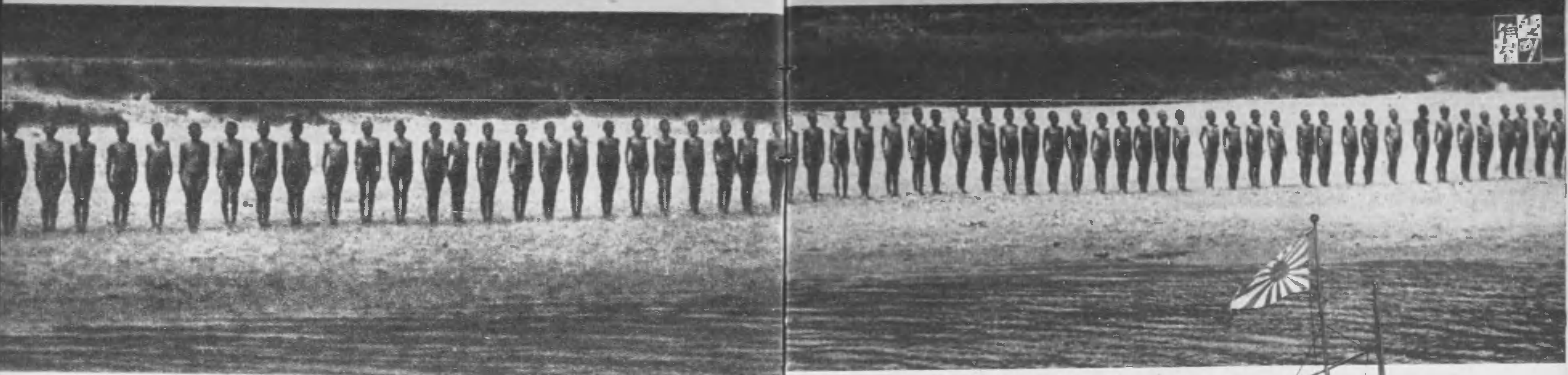
⇨隊員の凛々しいいでたち

⇦新京市の大同大街を國務院へ堂々行進する女子青年隊

⇨沼で洗濯。『かうして洗ふとすつと綺麗になるわよ』

⇦乳搾りも短期間とは思へぬほど上手になつた

『村つくり』の希望を語り合ふ。大きな理想、樂しい夢⇩



鍛に鍛ふ

大阪市　中村照夫

[illegible]訓練は、大阪府布施市第七國民學校海洋少年團のお家藝です。同校の少年團は全國でも有名な[illegible]したものですが、團員約八十名は毎日午後、[illegible]大和川の[illegible]へ『日の塔』附近で、お手のものの水泳訓練を[illegible]、[illegible]を吹きとばして鍛へに鍛へてゐます

⇧整然と勢揃ひした少年團員

わつしよい、わつしよい。敵陣めがけてまつしぐら

増産手帖

稲熱病と浮塵子の防除に努めませう

穂頸稲熱病やセジロウンカ、トビイロウンカは、稲の病害虫の中で最も恐しい大敵です。そして、大減收の原因となることが少くありません。ところで、いよ／＼これ等病害虫の發生時期となりました

さあ、穂頸稲熱病に對しては

▽窒素肥料の効き過ぎたやうな田圃とか、毎年出易い田圃、それからまた、今まで葉稲熱病の多く發生したやうな田圃等には特に注意して

▽穂孕期、穂揃期には必ず薬劑▲

▲を、出來るだけ共同撒布でやりませう

▽開花期に撒くと、稲が弱くなることがあつても、玄米には影響ありません

それから浮塵子に對しては

▽常に早期發見に努めて適期防除を

▽出始めてから一株に幼虫が十頭以上になつた頃を見計つて

▽早期に、出來るだけ共同で注油驅除をしませう

穂肥をしませう

穂肥は増産のため非常に有效ですから、次ぎのやうな點に注意し、指導者の指導に従つて、ぜひ實行いたしませう。穂肥に使ふ肥料は硫酸アンモニアのやうな速效性窒素肥料に限ります

▽穂肥の時期は稲の出穂期（穂×

×の出はじめ頃）の約二十五日位前で、盛んな分蘖を終つて葉色が僅かに褪せた頃です

▽穂肥の分量は稲の出來を見て定めるべきですが、だいたい段當り硫酸アンモニア一—二貫程度でよろしいでせう。二貫以上施すと危險ですから注意を要します

▽穂肥の施し方は、だいたい次ぎの要領で行ひます

1、分量が少いから乾土または砂等と混ぜ、容積を増しむらなく撒布します

2、施肥前、湛水とし、施肥後よく土とまぜ合はせます

▽分蘖期を過ぎてもなほ葉の色が褪せず、眞青である場合があります。これは稲が肥料分を澤山に含んでゐる證據ですから、かやうな場合は穂肥を行つてはなりません

國民映畫

情報局監修『戰ふ日本』特輯

常に戰場に在り

日本映画社製作

本映畫は、元帥山本五十六大將の不滅の武勳をしのび、元帥の幼少時代より太平洋最前線上空において直接指揮中敵と交戰、壯烈なる戰死を遂げられるに至るまでの、盡忠至誠、滅私報國の烈々たる精神につらぬかれた生涯を叙し無言の凱旋をなされた元帥の英靈を迎へ、嚴肅に執り行はれた國葬の狀況を記錄した映畫で、武士の心構へとして元帥が幼少の頃より終生懷いてをられた『常在戰場』の精神を以て、一億國民が總力を擧げて米英擊滅に邁進することこそ、元帥の英靈に應へまつる道であることを示したものである

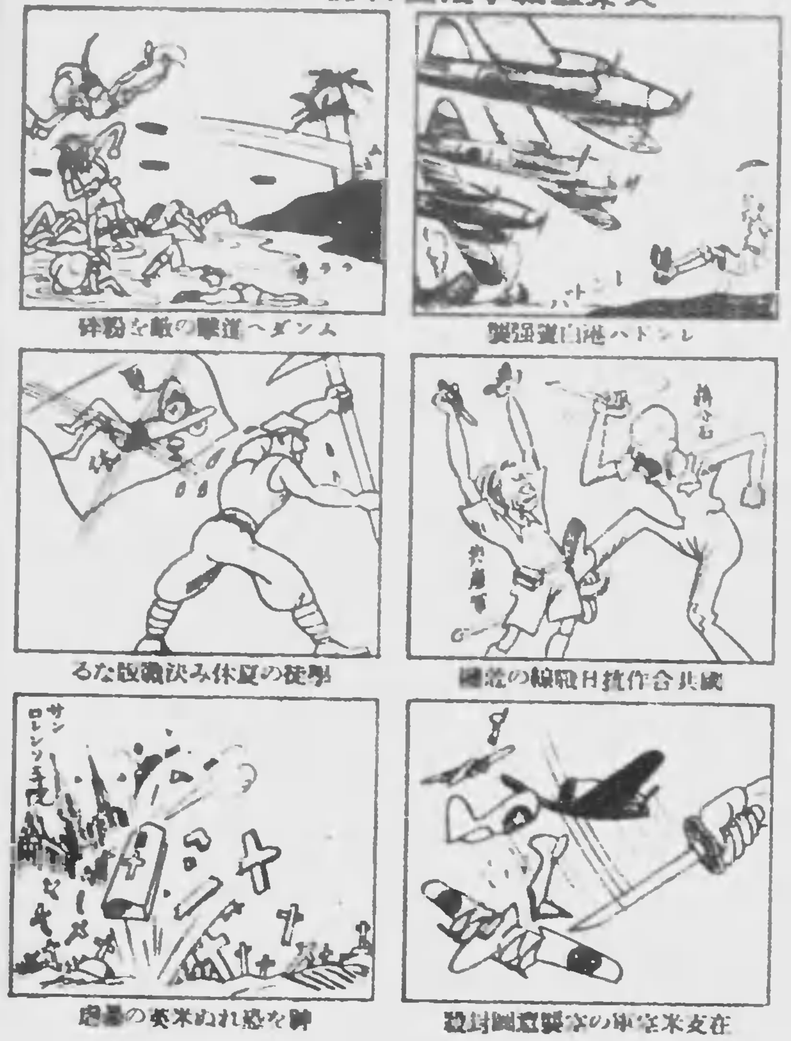
★表紙

南太平洋は決戰の修羅場だ。レンドバにムンダにニューギニアに、砲聲が密林に轟き渡る。擬裝した砲門の引金は灼けて手をとがすほど熱い。が、それにもまして熱く燃えるもの、それは最後の一兵まで戰ふ皇軍傳統の敢闘精神だ

海軍關係寫眞の複寫複製は海軍省承認濟（第五二四二號）

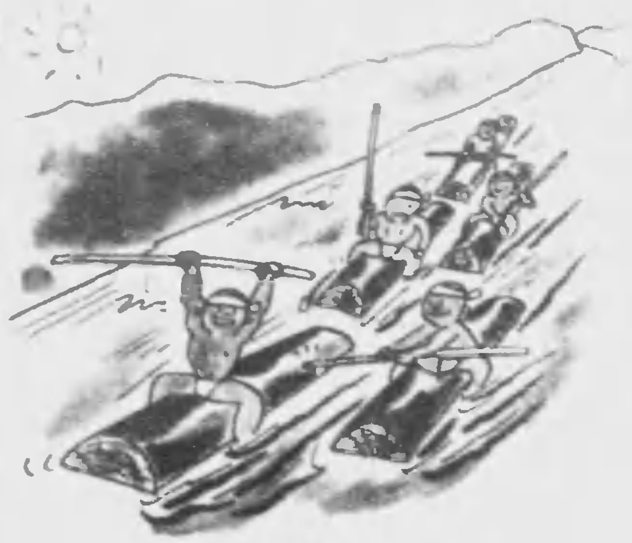
大東亞戰爭漫畫日誌

石川進介



ムンダへ進撃の敵を粉砕
レンドバ港口護送船團殲滅
學徒の夏休み決戰體制なる
國共合作抗日戰線の崩潰
神をも恐れぬ米英の暴虐
在支米空軍の要塞圖封殺
サンロレンソ

照準器

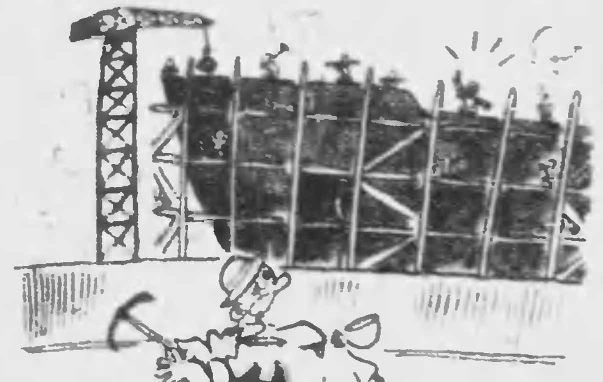


河ありて

山川哲

伐出木材に跨つて激流を下る。これこそまことに増産健民なり矣

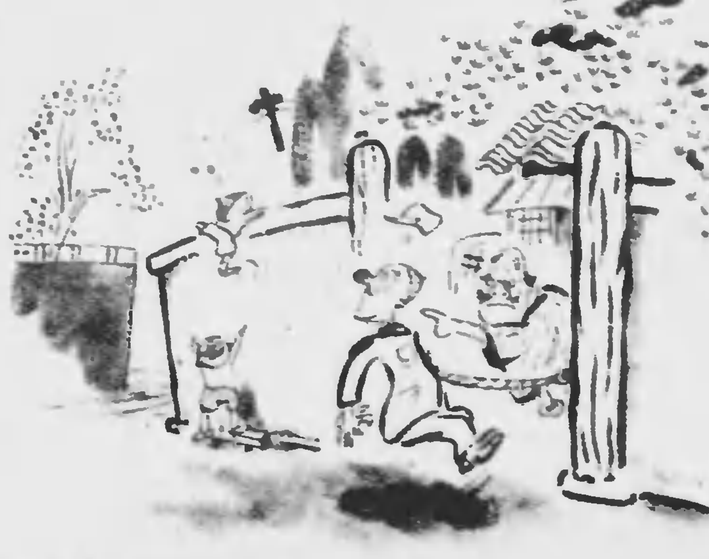
増産健民



船か山か

植木敏

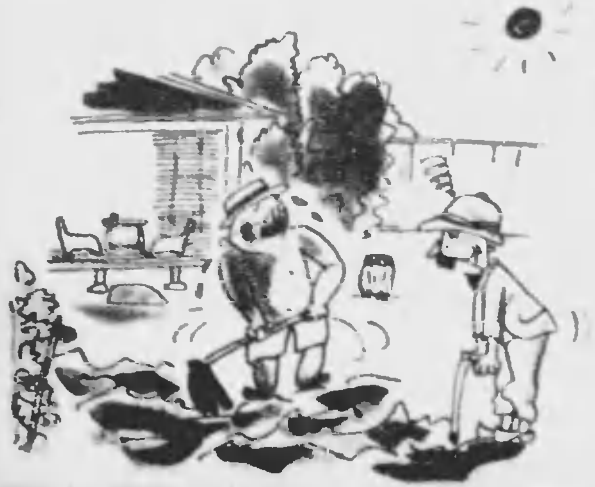
「おー、山へ行くんか—こゝから見晴しがよくて、空氣もいゝぞ。どうだ、山へ登るより船をつくらないか—」



常に錬成

白路徹

「よう來たネ、だが、うつかり此處は通せない。君も若いんちや。入口はあちら。挨拶は先づ錬成と行かう」



汗は流しやう

山川哲

「尊い汗をゴルフなぞで流してをつたのが恥かしいよ。まあ俺の作つたトマトでも喰うて行かんかい」

アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
www.jacar.go.jp

寫眞週報　昭和十三年三月十六日　第三種郵便物認可　昭和十八年八月十一日發行（毎週一回水曜日發行）第二百八十四號

勝つために
まだある無駄を
國債へ！債券へ

賣出
八月二十日より九月六日まで

國債貯金を

大藏省

本誌を回覧に
本誌を、隣組や職場で回覧するなど、出来るだけ有効に御利用下さい

前線慰問にも
まだお讀みになつた本誌を前線慰問に送りませう。送料は[illegible]

申込所
全國各地官報販賣所
書店・驛賣店
新聞販賣店
寫眞材料店

定價
一部十錢　送料一錢
（外國郵送に依る地域は送料[illegible]）
▲[illegible]の場合は其の[illegible]を申受けます

昭和十八年八月十一日　印刷發行
編輯　情報局　[illegible]
發行　内閣印刷局　[illegible]

寫眞週報
（禁轉載）

[illegible]

内閣印刷局印刷發行